医療の届かないところに医療を届ける

JAPAN HEART NEWS

Japan Heart

冬
2020

新型コロナウイルス感染症緊急支援

01 ミャンマー
02 カンボジア
03 ラオス
04 SmileSmilePROJECT

新型コロナウイルス感染症緊急支援

クラスター支援「災害支援ボランティアチーム」

11月12日、ジャパンハート東京事務局に一本の電話がありました。それまでのクラスター支援において何度も協働をさせていただいているDMAT(厚生労働省が管轄する災害派遣医療チーム)所属医師より、「ジャパンハートからの医療者派遣は可能か」という問い合わせを受け、その後すぐに札幌市より正式な派遣要請をいただきました。

通例の自然災害を主とする緊急支援においては、発生後にボランティア登録者に対して呼びかけを行い、出動可能なメンバーの日程調整を行います。しかし新型コロナウイルス感染症の発生以降、普段病院に勤務している医療従事者にとっては、クラスター支援後の自主隔離期間2週間を含めた休暇を取る必要があり、活動期間も限られるためボランティアに参加することが難しい状況でした。そのためジャパンハートでは、第三波発生時に備えて要請を受けた際に即応できる体制を強化するため、10月より新たにジャパンハート独自の「災害支援ボランティアチーム」を編成しました。メンバーはジャパンハートに所属しますが、平時には提携病院等に勤務する一方、有事の際には要請に従って出動を行います。これには、急な人員欠如を許容して下さる、提携病院のご理解が必要不可欠でした。

人的支援
医療チームの派遣

自治体や病院からの要請を受け、クラスターが発生した医療・福祉機関へ医療チームの派遣を行っています。これまでの派遣人数は、医師・看護師のべ計43人にのぼります。

物的支援
医療用マスクの配布

4月中旬、クラウドファンディング及びチャリティ・オークションで14,605人もの方々から寄付を受け、約200万枚のマスクを全国726医療機関に配布しました。

支援者の支援と「受援力」

翌13日、先遣部隊が札幌市に到着。対策本部のある保健所での会議に参加後、緊急性の高いと思われる介護福祉施設を複数か所視察し、内部や患者の状況等を確認します。ジャパンハートが緊急救援において大切にしていることは、私たちが行うのは「支援者の支援」であるということ。短期間で現場を離れる以上、その後に日常が戻るまでの長い期間を支えていく現地の方々にとってどんな支援がベストなのか、撤収後も見据えて実施していくことが求められます。強いストレスに晒されている被災現場では、善意のボランティアが却って現地の方々に負担をかけてしまうことが少なくありません。災害支援の世界には、「受援力」という言葉があります。支援をする側にも、受ける側にも、心構えや技術が必要です。私たちは、「支援する機会をいただいている」。この言葉を心の中で反復します。

国内の「医療の届かないところ」

調査の結果、ジャパンハートはまず札幌市内の介護福祉施設3か所で活動を行うこととなりました。今回の支援の特徴は、派遣先が病院などの医療機関ではなく、いずれも介護福祉施設であることです。札幌市内の医療機関が既に対応のキャパシティを超えており、陽性患者の受け入れが困難であることから、クラスターが発生した場合にも搬送がままならず、施設内で医療処置をする必要が生じていました。本来、介護福祉施設は「生活の場」であり、「治療」を行う機能はありません。設備的にも人的にもリソースが足りない状況で、現場の方々は自身も濃厚接触者でありながら、必死に入所者のケアにあたっています。次々と欠勤が出る中で、責任感から体調不良を言い出せず、倒れてしまった方もいました。

新型コロナウイルス感染症の拡大によって起こっているのは、「命に優先順位がつけられる」事態です。病院のベッドにも、酸素投与に必要な呼吸器にも、そして医療従事者の数にも制限があります。一部地域では既に、「この最後の呼吸器を、誰に使うか」という議論が起こっています。ある患者さんは、「自分はもういいから、他の方に使ってほしい」と、機材の使用をお断りになられました。

この問題は、新型コロナウイルスの陽性患者に限られた話ではありません。例えば交通事故が起こってしまったとして、救急機能がパンクしている状況下では、迅速な治療が受けられないのです。医療保険が整備され、世界で最も病床数が多いといわれる日本国内に、まさに今、「医療の届かないところ」が生じています。
ジャパンハートは「医療の届かないところに医療を届ける」団体として、感染拡大を食い止めるため引き続き尽力していきます。なにものにも代えられない、目の前のたったひとつの命を、失わないために。

そしてもう一つ、皆さんにお願いしたいことがあります。それは「感染症について、可能な限り正しい知識を持つ」こと。感染した患者やクラスターが発生した施設の職員は、ウイルスと同時に、周囲の偏見とも闘わなければなりません。一度感染した患者には高確率で抗体ができるため、再感染リスクは極めて低いといわれていますが、治療終了後もご本人のみならず家族が差別的な視線に晒される、という声がよく聞かれます。感染は誰もに起こり得ることとして、ひとりひとりが思いやりの心を持ち、それぞれの持ち場でできることを。

新型コロナウイルス感染症と自然災害 - 令和二年七月豪雨

7月4日、北九州で豪雨による洪水被害が発生したことを受け、ジャパンハートは熊本県八代市及び人吉市の避難所計3か所に医療ボランティアチームを派遣し、7月7日から8月末まで継続支援を実施しました。急性期医療ニーズの減少に伴い多くの医療団体が7月中には撤収する中、現場に寄り添い続けるジャパンハートらしい支援を行った2か月となりました。特に今回の場合、新型コロナウイルス感染症の影響により、県外からのボランティア受け入れが平常時のように円滑に進まず、実際に避難所のひとつでは支援者の陽性が判明したことで大規模な消毒活動が余儀なくされるケースもありました。保健師の方々が通常の地域巡回に集中できるよう、ジャパンハートの業務は避難者の方々に対する健康管理が中心となります。避難所内で発熱者が出た場合、隔離スペースで経過観察を行いますが、ある患者さんが「もしコロナに感染していたら、子供が学校で虐められるかもしれない、もう街にはいられない」と泣いておられました。私たちの想像以上に、感染症に対する意識は地域によって異なります。地域の方々のストレスとならないよう、ジャパンハートもPCR検査の実施やメンバーの入れ替え制限など、被災者心理に細心の注意を払う必要がありました。
また近年、災害現場で支援活動を行うためには支援者間の横の繋がりが重要視されています。コロナ禍において民間組織の避難所活動に制約がある中、唯一避難所内における直接的支援活動を行う団体として、避難されている方の生活状況等の報告に努めました。県庁や市町村といった自治体、DMAT、災害対策本部、医師会、看護協会に加えて、熊本県内で災害支援を行う団体が集まる「火の国会議」に定期的に参加し、民間団体との情報共有も並行して実施するなど、発災時の協働の重要性を改めて認識する支援となりました。

01 ミャンマー

厳しい制限の中でできる医療

現地人医療者が中心となって手術を実施

新型コロナウイルスの影響はミャンマーにも及び、医療活動の制限が今もなお続いています。日本人医療者の渡航が困難となったばかりか人が集まることも、国内での地域間移動さえできない…。待ってくれている患者さんがいるにも関わらず、毎月続けてきた手術も、出張診療も叶わず、そして患者さんが病院に来ることさえ難しくなっていく現状に、悲しみや悔しさを抱いていました。この現状の中でも今、私たちにできることは何か？求められていることは何か？目の前の患者さんに向き合い続けました。「考えてみよう。やり方はいろいろあるよ」。現地人スタッフに励まされながら、一緒に頭を悩ませる日々が続きました。そんな中、状況が一時落ち着いた8月には、昨年度から新たに活動を開始したティーサウン病院にて、現地に残った医療者で出来る手術を計39件行うことができました。手術前には感染対策はどのように行うのか、手術の内容・件数などスタッフ間で綿密に話し合い、細心の注意を払いつつの実施。医療を届けられることへの喜びと感謝の気持ちを改めて強く感じました。 困難な状況が続いていますが、より多くの人々へ医療を届けられるよう、私たちはこれからも考え続けていきます。

DREAM TRAIN - One for All, All for One -

毎年6月に新学期が開始されるミャンマー。今年は、中学生以下は一日も通学ができないまま上半期を終えました。7月末に新学期が開始された高校生も、8月末には休校となり、その後再開の目処は立っていません。

しかしコロナ禍での変化をポジティブに捉える男の子がいました。自宅待機措置により出勤できるスタッフが減った施設でオンライン授業のセッティングやパソコンの先生、そして日本語通訳などの役割を担ってくれているトゥントゥンナインくんです。

彼は、塾がオンライン化したことでヤル気のある子どもたちが何度も繰り返し勉強できる環境になったことや、春から始まったラグビーやサッカーのオンライン・クラスがとても勉強になること、施設の先生とゆっくり話ができる時間が増えたことなどを笑顔で語ってくれました。また、子どもたちの変化はその心にも見られます。外出できない現状について、持病を持つ友達や高齢のスタッフのために、今は頑張るときだという意識が芽生え始めたのです。育まれた「One for All, All for One」の精神は、きっと社会に出た後も子どもたちを支える武器の一つとなるでしょう。

オンラインイベントの通訳をする
トゥントゥンナイン

iPadを使用したプログラミング
教室に参加する男の子

02 カンボジア

急増する小児がん患者

カンボジアの医療活動拠点「ジャパンハートこども医療センター」は、口コミの広がりなどにより、前年実績を上回る外来診療者数を記録しています。今年度は半年間で既に9,000名近くの外来患者さんに治療を提供することができました。
現在、カンボジア国内で新型コロナウイルスの市中感染は起きていないものの、海外からの持ち込み感染者が発覚する状況が続き、水際対策が強化されています。この水際対策は少なからず、当院の小児がん患者数にも影響を与えています。
昨年同時期5名だった小児がん入院患者は現在31名となっており、治療室が満床となったため、急遽院内の改造を行いました。カンボジアでは、高度医療を受けるために隣国のタイやベトナムの医療機関を受診する患者さんが多く、本来であれば国外で医療を受けることを希望する家族も、海外への渡航が難しい今、当院を受診するようになりました。中にはタイの国境近くにある自宅から、12時間かけて来院した患者さんもいます。加えて、日本人専門医療チームの渡航が困難な状況で、当初計画していた手術予定が数か月遅延してしまうことも、入院患者数が増加せざるを得ない要因となっています。
この問題を受けて9-10月に実施した、カンボジアの新型コロナウイルス感染症二次被害を防ぐためのクラウドファンディング。目標金額1,000万円を大きく超える約1,870万円の支援が646名の方から集まりました。現在、この資金を活用し、高度医療の提供を継続するための医療機器の導入と、現地人医療スタッフの育成を急いでいます。

カンボジア人医療者の成長

日本人医療者が少ない中で術後管理を任せられる現地医療人材の育成は重要な課題となっていました。日本で豊富な臨床経験を持つ村上看護師は、ここで看護師の教育に携わっています。常に患者さんにとって最善の選択をし、そのための苦労をいとわない一貫した彼女の姿勢と情熱から、若手看護師たちは技術だけでなく、心を尽くして行う日本の看護を学んでいるようです。
今年秋、小児がんの大きな手術を受けた患者さんに2週間以上にも及ぶ集中治療を行いました。つい数か月前、賢明な治療の末に患者さんを看取らなければならない苦しい経験をしたばかりの看護師たちは、今回こそは必ず助けたいという気持ちで、術前から真剣に学び、準備を整えました。集中治療が始まると、一般的な術後管理に加え、人工呼吸器管理、腹膜透析など当院で初めて取り組む処置も行いましたが、日本人医療者も驚かされるような集中力で完璧にこなしていました。ベッドサイドで精神的に不安定になった患者さん家族を傍でしっかり支えながら、できる最高の医療を提供するため真剣なまなざしで治療にあたっていました。 今回の経験を経てさらに学び成長したカンボジア人看護師たちと一緒に、これからもより良い医療を提供できる病院へと、成長し続けていきたいと思います。

現地医療スタッフを指導する村上看護師

小児がん患者さんの集中治療にあたる現地医療スタッフ

患者家族との絆

2年前に小児がん治療を開始して以来、長期に及ぶ治療の末どうしても患者さんの命を救えず悔しい想いで見送ることを何度か経験しました。我が子を泣きながら抱え病院を去っていく患者さんの家族は、深い悲しみの中でも例外なく、私たち医療者に手を合わせ「みてくれて、ありがとうございました」と言います。 救うことはできなかったけれど感謝されるのは、カンボジアには、まだ私たちのように患者さんに病気のことをしっかり説明し、命が助かるかどうかにかかわらず最後まで丁寧に治療する病院が珍しいからかもしれません。患者さんを最後に見送ってから時がたっても、この病院に愛着を感じ、我が子を治療したスタッフに会いに再び訪れてくれる家族もいます。 このようにカンボジアの患者さん家族と結ぶことができた絆は、私たちの一生忘れることのない財産となっています。私たちが提供するのは、「心を救う医療」。患者さんとその家族のことを親身に考え寄り添う医療を、これからも精一杯行っていきます。

03 ラオス

学んだことを活かし、私たちが患者さんを守る

現在、ラオス北部・ウドムサイ県での甲状腺疾患診療は、ラオス事務所の現地スタッフとウドムサイ病院の医療者が協力して行っています。ラオスには、3月半ば頃から一気に新型コロナウイルスの影響が押し寄せてきました。4月の頭には迅速なロックダウンと、出入国制限をかけ、そのおかげで、感染者数は今でも20人前後に収まっています。他方、日本人職員の帰国(退避)が滑り込みの形になったり、今でも日本人の渡航が叶わず、手術活動を行うことが出来なかったりと、大変な状況は続いています。手術待ちとなっている患者さんには申し訳ないですが、もうしばらくの辛抱をしていただいています。 そんな厳しい状況の中でも患者さんがジャパンハートを頼りにし続けてくれているのは、ひとえにウドムサイ病院の医療者達のおかげです。彼らは、これまでに日本人医師や看護師から教わったことを実践し、月に1度か2度、約50人前後の患者さんに対しての検査や薬の処方を行い、症状が悪化しないよう努めてくれています。そもそもの病院業務に加え、ジャパンハートの患者さんを診察してくれているのですから、負担も大きいはずです。それでも「少しでも患者さんとジャパンハートの役に立ちたい」と言って、活動を続けてくれています。

甲状腺疾患を検査するウドムサイ病院医師

ラオスの入国制限も少しずつ解除され渡航の見込みが立ち始めてきました。この期間ジャパンハートの患者さんを守ってくれていたウドムサイ病院の医療者達に感謝しつつ、その気持ちを「技術移転を完了させる」という形で今後示していこうと思います。

04 SmileSmilePROJECT

何気ない家族一緒の時間の大切さ

感染症の拡大により、入院している小児がん患者の子どもたちは家族との面会が遮断となった時期もありましたが、現在は状況が緩和され、その分たくさんの外出同行依頼をいただいています。梅雨が明けた7月には、株式会社一休様のご支援を受けてホテル雅叙園東京での宿泊企画を実施しました。

今回は、お子様の治療のため8カ月もバラバラで過ごしていたというご家族を招待。ミュージアムホテルというだけあり、美術工芸品があちらこちらにある日本美に彩られた素敵なホテルです。景色が素敵なラウンジでおやつを楽しんだ後は、早速お部屋へ。大きなベッドに大はしゃぎのお子様を見てご両親が目を細めます。子どもが病気になると、入院治療中はそのお子様はもちろん、家族みんなで病気に向き合い、それぞれが寂しい思いや我慢をして過ごされています。何気ない家族一緒の時間がどれだけ大切か、ご家族を見ているとよくわかります。株式会社ラブグラフ様のご協力で、そんな家族の時間を素敵な思い出としてカメラに収めていただいたところ、お母様は「家族写真がないのでとても嬉しい」と喜んでおられました。その後もご家族は、インルームでのディナーやジェットバスを楽しまれたそうです。新型コロナウイルスの影響により外出もままならない今年の夏でしたが、家族のかけがえのない時間を、これからもたくさん作れますように。

【東京事務局よりお知らせ】

国際連合よりUNIATF Award 2020受賞

本年、「2020 United Nations Inter-Agency Task Force on the Prevention and Control of Non-communicable Diseases Award」を、国内で唯一受賞しました。この賞は、グローバルレベルで、NCDs（非感染性疾患）、メンタルヘルス、その他のNCD関連のSDGsの予防などにおいて顕著な貢献をしている政府機関や組織、団体を表彰するものです。ジャパンハートの「東南アジアの子どもたちの非感染性疾患による死亡減少への貢献（それを実現するための小児外科治療、各活動国で実施している高度な専門医療、カンボジアでの小児がん治療、ボランティアスキームの構築、拠点を構えての人材育成）」が評価されたことを、スタッフ一同大変嬉しく思っています。

この度の受賞、そして国内での新型コロナウイルス感染症に対する活動を通して、私たちは「非政府・非営利組織として何ができるか」を改めて考えるようになりました。そのひとつの答えとして、昨今のSDGs（持続可能な開発目標）に対する社会の更なる関心の高まりを踏まえ、来年春頃に「Japan Heart SDGs Conference」を開催する運びとなりました。創設者吉岡秀人の基調講演の他、様々なSDGsの取り組みに関するセッション、アワードを予定しております。「競争」ではなく「共創」を。皆さまのご参加を、心よりお待ちしております。

特定非営利活動法人ジャパンハート
〒110-0016
東京都台東区台東1-33-6 セントオフィス秋葉原10階
電話：03-6240-1564（平日10：00-17：00/土日祝除く）

Japan Heart